博士論文要約

在宅患者における短時間通所リハビリテーションの効果および有効性の検討

学籍番号　W8512002
氏　　名　伊藤 三千雄

背景　病院や診療所における維持期リハビリテーションは、従来「外来リハビリテーション」として提供されてきたが、2009 年の介護報酬改定において、リハビリテーション特化型（1～2 時間）の「短時間通所リハビリテーション」が新設された。また「みなし指定」として医療機関でも提供が可能となった。しかし、短時間通所リハビリテーションの効果や有効性についての研究は報告がまだ少なく、家族を含めたプログラムの報告はまったくみられていない。

目的　本研究では、短時間通所リハビリテーションの効果について明らかにし、在宅患者およびその家族における QOL の向上に効果的なプログラムを検討することを目的とした。

方法　第 2 章では、短時間通所リハビリテーションのプログラムの効果および意義について検討を行った。第 3 章では、短時間通所リハビリテーションのプログラムが在宅患者および家族の精神面に与える影響について検討を行った。第 4 章では、3 ヶ月間の短時間通所リハビリテーションのプログラムが在宅患者および家族の身体機能や精神面、介護負担感に与える影響を検討した。

結果　短時間通所リハビリテーションのプログラムが維持期における在宅患者の身体機能の改善に有効であることが示唆された。また、在宅患者の身体機能の改善に家族および家族の運動習慣が関与していることが考えられた。さらに、短時間通所リハビリテーションのプログラムが在宅患者および家族の精神面の改善に有効であることが示唆された。

結論　短時間通所リハビリテーションの効果として、在宅患者の身体機能を改善すること、在宅患者および家族の両者の精神状態を改善することが考えられた。また、在宅患者の身体機能や精神状態の改善には、家族の関わりが大きく関与していることが示された。そのため、家族へのアプローチは重要であり、リハビリテーションに家族を参加させるシステムを構築することが必要であると考えられる。また、在宅患者のリハビリテーションにおいて、患者と家族を繋ぎ両者が共有できるものとして運動は有効であると考えられる。

今後の課題　今後の課題として、在宅患者および家族の精神面における評価指標の検討が必要である。また、在宅患者の身体機能の改善に家族および家族の運動習慣が関与していることが考えられるため、家族の身体機能や精神面を定期的に評価することが重要であり、評価を行える仕組みづくりも必要である。さらに、患者および家族を含めた家族全体の評価を加えることが重要であると考えられる。